

書 評



『図説 哺乳動物百科 全3巻』

遠藤秀紀（監訳）

浅倉書店

浅川満彦（酪農学園大 獣医学部）

本書は2003年、英国Dorling Kindersley社刊行『Mammal』の翻訳書である。原書はロンドン動物学会 Zoological Society of London (ZSL) の専門家が中心に執筆されたものである。ZSLは、いうまでもなく、ロンドン動物園をその研究フィールドの1つとして運営する研究機構である。本書は3巻で構成され、それぞれの巻は次のような大項目が立てられている。

第1巻 総説・アフリカ・ヨーロッパ

第2巻 北アメリカ・南アメリカ

第3巻 オーストラレーシア・アジア・海域

「総説」は哺乳類の定義、進化と分類、人類の役割などが扱われている。まず、哺乳類の特徴 原著では古くなった系統分類を監訳者が最新のものに書き直されているので参考になるし、獣の生物学的な特徴ばかりではなく、人類との正負両面の関係が簡潔に記され、これだけでも学習効果が高い。各論に相当する部分は、それぞれの地域の生息地ごと（たとえば、陸域では草原、砂漠、山地、湿地、森林、島、極地、海域では沿岸、外洋、極海などに分けられる）に、その地域に生息する代表的な種の豊富な写真とコラムを使い大変に判りやすい解説書となっている。多くの写真はZSLの財宝であろうが、理屈抜きに圧巻である。

野生動物医学の初学年が学ぶ齊一的な内容には、大きく分け2つのタイプになる。1つは生物科学の学問体系に準じ、形態・機能・進化・生態などに大別し、さらに疾病、臨床、栄養、飼育、外来種問題などのトピック的な生物・社会現象を混ぜ、それぞれに相応しい、あるいはもっとも問題視される種または群集をモデルに解説するタイプ。もう1つは、対象動物グループ（両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類）を網羅的かつ平等に過不足無く解説するタイプ。前者のような展開は「トピック型」、一方、後者は「網羅型」となる。

「トピック型」授業としては、野生動物医学会が提案する「獣

医生態学」のシラバスが該当する。また、「トピック型」書籍としては、東京大学出版会『哺乳類の生物学 全5巻』がある。各巻は分類、形態、生理、社会および生態の副題が付き解説されているが（<http://www.utp.or.jp/series/mam.html>）、それぞれの巻は独立した講義科目に相当するほど幅広い。もし、これらを取って1単位程度の科目とするならば、これら数多の現象からトピック的な事項を集めた授業展開となろう。様々なトピックの連続は、これからの自分の生きる道を探っていくべきかの指針を探るような場合、適切なのかも知れない。

しかし、様々な動物と対峙する保全医学者を養成する専門教育の場では、どこかで体系的な背景を身につける訓練が必要になる。したがって、「網羅型」教育が不可欠となるが、単なる枚举では退屈なので、学問継続のための知的興奮を維持させる工夫が要求される。まず、授業全体に一貫した文脈を持たせることである。たとえば、taxa群を系統発生的な配列にしつつ、taxa by taxaの形式で生態的な関係を絡めさせながら周辺情報でメリハリをつける。これは私の「野生動物学」で採用しており、「系統優先型」としよう。もう1つは、生物地理区に準じ、それぞれの地理区で、たとえば生息域ごとに紹介する方式で、「生物地理優先型」とする。多くの動物園の展示でもこのような生物地理区・生息域融合の手法が採用されている。

理想を言えば「トピック型」と「網羅型」のそれぞれ縦横の糸となり、教育効果の高い授業をすればよいが、時間的制約が厳しい現状では難しい。良書をもとに自助努力に委ねられている。ここで紹介したのは、「網羅型・生物地理優先型」の教科書としてのモデルとなるし、いわゆる一般の教科書としてイメージされる退屈とは対極にある点でも出色である。このことは、日本語版に特別に寄稿された監訳者で「闘う解剖学者」の遠藤秀紀氏（京都大学霊長類研究所）の「あとがき」を一読されればその理由が判ろう。その中で、遠藤氏は彼が身を置く比較解剖学を「研究対象を選択することがない体系」と記されたが、野生動物医学を構成するほかの構成科学も「」は同じ。学生諸君が獣医科系大学に入った動機が「何々が好きだから、何々を助きたいから」というものでも、科学として野生動物医学や保全医学に一生貢献することを模索するのなら、「」の点を意識的に意識すること。そのようなことを考えさせてくれた著作でもあった。